随　想

今どきの年寄り

九州工業大学　物質工学科
教授
岸武　勝彦
Katsuhiko Kishitake

毎年6，7月は就職を控えた学生諸君にとっては落着かない時期である。就職して社会に出るには、長年なれ親しんだ“大学湯”とでもいうべきぬるま湯から上がらなければならないので、就職活動はあまり気の進まないものであるらしい。近頃は親も裕福になったため、もう暫くぬるま湯につかっていたいがために大学院に進学する者までいる恵まれた時代なのである。しかも希望の企業に採用が決っても、この後定年まで働き続けなければならないと考えると、「喜びも中ぐらいなり就職内定」というところだろう。最近の学生はバブル崩壊前の座して待てば企業が三顧の礼をもって迎えに来てくれたイメージを抱いて入学しているので、昨年来の就職氷河期といわれる状況を理解し、受入れるのに戸惑いを感じているようである。

こうして胸ふくらませて第一希望の会社に就職した学生も、また不本意ながら第二、第三希望の会社に就職した学生も、昔と違って理由もなくあるいは同僚や上司との些細なトラブルでいともあっさりと職場放棄するのであるから、会社第一主義で頑張り、日本の高度成長を支えてきた世代の会社幹部の人にとって、今どきの若い者は理解の範囲を越えた新人類とかエイリアンに思えるのも無理からぬことである。このような理解し難い若い者に我々の将来を託していかなければならないのだから、将来は暗たんたるものであろうか。いや悲観するには当たらないだろう。

江戸時代にも「今どきの若輩者は‥‥」と不満をもらす話があるし、奈良・平安の時代はおろか縄文・弥生の時代にも年寄りは若い者を批判したことだろう。おそらく石器時代でも「今どきのワッカもんはロックにうつつをぬかしてマンモスのワナかけもろっくにできない。こんなことではワッシらのお先は真暗だ。」と年寄り連中はぼやいたであろう。しかし未だに破滅には至っていない。新人類と言われた学生達も幹部社員になる頃には同じような不満をつぶやくのであろう。世の変化のテンポが指数関数的に速くなっても、古今東西同じようなことが言われてきたということは、“今どきの若い者”は今どきの社会の変化とは関係なく、ただいつの世にも存在する世代間の確執なのであろう。と考えるとあまり心配することもなかろう。

しかし、就職試験の時期に会社の人事担当の方から“今年も”ではなく、「今年は優秀な学生をよろしく」とやんわりとではあるが厳しいことを言われると、時には欠陥商品と言われる最近の若い者を輩出してきた大学の教師として責任はないのだろうかと一抹の不安を感じることもある。このようなことを感じていると、7月1日（平成7年）に欠陥商品による消費者被害の救済を目的にする製造物責任法（PL法）が施行されてハッとした。欧米ではかなり前から施行されているが、日本でも遅まきながら、政府・自治体も相談窓口や検査機関の体制整備を進め、産業界も個別分野ごとの苦情処理機関を作り、消費者対応を計っている。この考え方を拡げて、就職した卒業生について、その卒業生を世に送り出した者が責任を負うとしたらどうなることやらと考えてハッとしたのである。おそらく卒業生を受入れた企業からはもちろんのこと、卒業生本人からもクレームがつくことは想像に難くない。大学の教師も今ま

でのように不況もリストラもどこ吹く風とノーテンキではいられまい。クレームに対しては原材料が悪かったとか、もっと上工程に問題があると他に責任転嫁するか、あるいは真面目に製品（卒業生）に対する苦情処理機関を作ってアフターケアをしたり、産業界が進めているように具体的な警告表示を製品につけるなどの対策を講じなければならないだろう。

天下に有能ぶりを知られた日本の役人はかなり前からこのような事態を予知していたのか、いつの頃からか「生涯学習」という言葉を頻繁に耳にするようになった。そして数年前、「リカレント教育」と「リフレッシュ教育」と例によってお役所の好きな英単語を使った清涼飲料水か基礎化粧品と紛う名前の社会人再教育計画が始まった。文部省の勝手な定義では、どういう訳かリフレッシュ教育がリカレント教育より高度な内容を教えるそうである。私の勤める九工大でも「リカレント教育」の一翼を担わされて三年間試行した。私は“NO”と言えない性格から、材料工学科におけるリカレント教育の企画・運営に当たることになり、近隣の会社からアンケート調査を行い、「材料工学に関する基礎的な講義」を設定した。当初定員割れでは格好が着かないので定員を25名にしたところ、三年間とも定員を上回る応募があった。社会経験のある受講生は皆向学心に燃えているので、単位を揃えることが目的の学生とは目の輝きが違い、教える側も学生相手の講義では味わえない喜びを感じることができた。馬耳東風と聴く気のない者に講義するのは苦痛であるが、講義中にも質問があり受講生の反応が伝わってくるリカレント教育は教えることを業としている者にとっては、一度味わうと止められない麻薬のようなものである。

過日、女子大生の姪と大学生と社会人の聴講態度の違いについて喋っていると、「学生が居眠りするような講義をするのは教える方が悪い。15分に一回は面白い話をして笑わせないと、今どきの若者は講義を聴いてくれないよ。」と反論し、「今どきの年寄りは自分の不勉強と無能を棚に上げて学生を批判する。」とのたまう始末である。18才人口の激減の昨今、今どきの若い者でも耳を傾けるように努力しなければ、製造物責任法で責任をとる前に、製造物を世に送り出すこともできなくなり、大学でもリストラを考えなくてはならなくなりそうである。こうなったら、話しべたの私も落語か漫才でも勉強して、若い者に迎合する術を磨くか、あるいはちと早いが後進に道を譲るか迷っていると、「あなた、いつまで寝てるの！また朝の授業に遅れるわよ。会社だったら真先にリストラよ。」という声で朝の心地よい眠りから覚めてしまった。